

10人で届ける地域



まるごとぶらり旅



谷川ゼミ年表

4月9日	4月29日	6月1日	6月4日	6月11日	6月19日	6月25日	7月13日	7月18日	7月23日	8月	9月26日	10月15日	11月2日	11月9日	12月15日
初回ゼミスタート	出の杭大会 参加	健康ウォーキング	フードバンク米家さん招へ	カレーパーティー	RUN伴キックオフ!!-ティング	認知症サポートー養成講座	ホームレス支援	多職種連携事例検討会	前期のゼミのまとめ	RUN伴に向かひの準備	ホームレス支援・夜回り	フードバンクあいづ訪問	RUN伴	ホームレス支援	「//」トライアワー報告会

メンバー

うつみゆうき おかざきゆうや きくいよしき きたもとけんた しもせゆうき
たいたかとし にしだれんた のむらしょうた みつおかたくま
たにかわかずあきせんせい



「認知症支援のつながり」

報告者 光岡拓真 太井孝俊 北本健太
(関西福祉大学 谷川ゼミ2回生)

キーワード：認知症センター、健康ウォーキング、RUN 伴あこう

I. はじめに

私たちのグループは認知症支援のつながりについて報告する。このテーマを選んだ理由は、身内に認知症の人がいたこともあるが、さまざまな学びや経験を通じて、家族や地域の力になりたいと思ったからである。

2015年時点では認知症の人は約520万人おり、このペースで進むと、2025年には団塊世代（1947年～1949年生まれ）が75歳以上になり、累計で約700万人（75歳以上の5人に1人が認知症）に達すると国は推計している。認知症になっても地域で安心して暮らせる「共生」、認知症になる時期や進行を遅らせる「予防」が大事となる。

そのような中で RUN 伴を運営する認知症フレンドシップクラブは「認知症になっても変わらない暮らしができるまち」というビジョン、「すべてのまちで認知症にやさしいまちづくりの拠点をつくり、つないでいく」というミッションを遂行している。

II. 目的

認知症支援のつながりについて、ゼミでは健康ウォーキングへの参加、認知症センター養成講座の受講、RUN 伴あこう実行委員会への参画といった経験と学びを得た。ここでは、その中でも RUN 伴あこうを中心として報告する。

III. 方 法

RUN 伴あこう2019実行委員会に、6月から11月まで約半年間の関わりを持った。

その中で代表の鍛治実氏、副代表の小西恭子氏、また医療・介護・福祉の専門職を中心とする市内ボランティアグループの「地域の輪」代表の濱田達也氏その他多くの関係者と接点を持てた。

健康ウォーキングでは濱田氏や小西氏と初めてお会いし、ともに活動した。

認知症センター養成講座では市の地域包括支援センターの有吉千恵氏の仲介で鍛治氏が講座を担当された。

IV. 結 果

健康ウォーキングでは、リハビリ専門職から助言をいただき、活動を通して介護予防の大切さに気づいた。

認知症センター養成講座の受講では、認知症に対する正しい知識と理解を持つとともに、認知症センターの役割について学んだ。認知症になるとどういう感じ方になるのか、周りの人は認知症の人に対してどのように接していくかが分かった。調べ学習では、センターは現在1,000万人以上にいることが分かった。

RUN 伴あこう2019では、認知症の家族（母親）を4年間介護されている方のお話を拝聴した。介護の辛さ、どのような差別・偏見があるのか、男性介護者にとって必要なものが分かった。タスキリレーでは約7.5kmを完走し、スタートおよびゴールセレモニーでは「RUN 伴あこうのテーマ」を披露する機会に恵まれた。

V. 考 察

誰もが笑顔になれるやさしいまちの実現が待たれる。認知症の人や介護する人（当事者）でつながり支え合うだけでは限界がある。地域で認知症の人やその家族に対してできる範囲で手助けすることが肝要である。専門職、学生、地域住民の三者がつながり、一緒に支え合える環境を築いていくことが必要である。

VI. おわりに

ゼミの活動で得られた経験と学びを、これからの地域における認知症への偏見・差別・嫌悪を無くす活動に活かしたい。

RUN 伴あこうのテーマ

らららららららら誰もが 笑顔で元気な
ららららららららんらら 赤穂を目指します

認知症があっても 認知症がなくても
一緒につなぐタスキ やさしい街をつくるんだ

RUN 伴 行歩や車椅子で
RUN 伴 参加も可能です

RUN 伴 赤穂市内そめるオレンジ
幸せを呼ぶんだ RUN 伴

主催：関西福祉大学 有吉千恵子
会員：鍛治実、小西恭子、濱田達也



「ホームレス支援のつながり」

報告者 岡崎優也 西田蓮汰 野村清太
(関西福祉大学 谷川ゼミ2回生)

キーワード：路上生活者ふれあいサークルレインボー、ホームレス、炊き出し、夜回り

I. はじめに

私たちはホームレス支援のつながりについて報告する。平然として暮らしている日本にも家がない人がいるのは何故なのか、そしてその人たちに向けて我々ができるは何だろうと気になっていた。ホームレスの実態に迫っていきたい。

II. 目的

ホームレス支援のつながりについて、ゼミでは調べ学習として、路上生活者ふれあいサークルレインボーのブログ記事やFacebook等SNSから、活動内容について事前に分析した。一方、その調べ学習を踏まえて、「おにぎりどうぞ」「夜回り」「炊き出し」を実践した。以上を踏まえ、調べ学習や実践活動において得られた気づきを中心に報告する。

III. 方 法

ステークホルダーは路上生活者ふれあいサークルレインボーの車田誠治氏。よく笑い、話す気さくな人柄から重い課題と向き合っているように見えないが、生活困窮者からの信頼はとてもなく厚い（「編集委員インタビュー」神戸新聞2019年10月13日付）。また、現地の厨房では、今井眞理氏、江草マサ子氏の両氏から指南いただいた。

IV. 結 果

路上生活者ふれあいサークルレインボーを説明するのに必要な語句（キーワード）をゼミで挙げてみた。その結果、子供、路上生活、炊き出し、ボランティア、夜回り、猫、姫路、おにぎり、学生、フードバンク、行政、公的援助、関西福祉大学、生活総合相談会、ホームレス、路上生活者、炊き出し、支援、サポート、ふれあい、訪問、団体、非営利、自立、活動、手渡し、協力、カトリック教会、姫路城、配給、カレーライス、豚汁、愛情、認知、相談、ホームレス自立支援、若者との共同作業、繋がり、被災地支援寄付他団体との連携、良い人材を育てる、市外の人への相談、良い街づくり、新聞、英語、姫路、NPO、社協、想定、秘密厳守。ふれあい、支え合い、感謝、思いやり、助け合い、信頼、不安、有志、心配、生活保護、苦労、協力、助け合い、常連、出会い、有志…。実に多様であった。

私たちが調査・実践で気づいたことは次のとおりであった。①路上生活をしている人の中が必ずしも市の援助を受けて生活したいと考えているわけではないこと。②失業だけじゃなくて様々な事情があって路上生活している人がいると知った。③協力することの大切さや、参加している人の多さ。④炊き出しのメニューの豊富さに気づいた。⑤表情からして炊き出しをする側の人の苦労。⑥ホームレスの活動を主にしているが、生活総合相談会などホームレスの方々への支援だけでなく一般の方への支援も行なっていること。⑦路上生活者だけでなく、路上で生活している猫も気にかけていること(猫の写真がたくさんあった)。⑧意外と路上生活をされている方がたに対して、どのボランティアの方が温かい視線を送っているので、全体的に穏やかであること。⑨ホームレス支援に来る人に常連がいるということ。路上生活者はひとりでぽつんと過ごしているとばかりでなく、路上生活者もどこかつながることはできているということ。

ゼミ全体としては7月にカレーライスの炊き出し、9月におにぎりどうぞ、11月に豚汁の炊き出しを実施できた。

V. 考 察

炊き出しはボランティア参加者の協力に加えてチームワークがないと難しい。外に出向いていくことは様々な方と関係を持つことができ様々な出会いがあるとわかった。ホームレスとの距離感も重要である。なぜなら、優しい方もいれば、文句を言う方もいる。ホームレスは他人事ではない。

VI. おわりに

「見学に来た」と、新しい来訪者の方も見えた。ホットした表情。つながることが路上生活者支援では大切である。

「フードバンクのつながり」

報告者 下世 悠貴 菊井 祥起 内海 優希
(関西福祉大学 谷川ゼミ2回生)

キーワード：フードバンクあこう、赤穂市社会福祉協議会、フードライブ

I. はじめに

私たちのグループはフードバンクについて発表する。近年フードバンクという言葉を耳にするが、一体それは何か。どのような経緯から始まったのか。私たちは、赤穂市社会福祉協議会で開催されているフードバンクあこうの様子を見に行き、フードライブの一端に触れた。地域の多くの人がフードバンクに協力していた。

余剰食品の活用の方法・対象は、支援が必要な家庭、子ども食堂、児童養護施設などであった。

II. 目的

今回の報告では、ステークホルダー（利害関係者）とのジョイント（接点）、フードバンクの経緯と誕生の背景、現在の日本のフードバンクへの取り組みと海外の状況なども踏まえて報告する。

III. 方 法

私たちは米家邦洋氏と接点をもった。2019年6月4日、ゼミに米家氏を招いた。そのときに初めて食材の寄付を行うとともに、フードバンクを設立したきっかけや思いをうかがった。

その後、ゼミ活動のスケジュールの関係で少し間を置くこととなったが、フードバンクあこうの開催日を見計らって、10月15日、実際にゼミ全員で米家氏が主宰する場を訪問した。これは11月9日に行うホームレスへの炊き出し食材の支援要請を兼ねるものであった。

なお、調べ学習として、Web調査を実施し、注目に値すると考えられる記事を収集した。SDGsにも着目した。

IV. 結 果

フードバンクあこう設立のきっかけは、米家さんは元高校の先生であり、教員時代に、満足に昼食を摂らずに授業を受けている生徒を目にされていた。一方、巷で大量に過剰生産されている食品や賞味期限切れで廃棄されている食品を、どうにか社会の役に立てられないか考えていたという。退職して時間に余裕が出来た2018年2月に「フードバンクあこう」を設立し、フードライブに取り組まれていた。私たちは、前期に食材を寄付したが、後期に炊き出し支援のための食材を提供していただいた。

日本では年間約646万トンが食べられる食材を廃棄していることが分かった。また海外では1950年以降フランスやアメリカなどの先進国で取り組みが始まられているが、日本は令和元年10月より「食品ロスの削減の推進に関する法律」(略称 食品ロス削減推進法)が施行されたところである。他方、子どもの部分では貧困を招いているということもわかり、SDGsとも絡めて方向を予定していた。子どもの貧困の連鎖に対し、2014年「子供の貧困対策に関する大綱」に教育の支援とともに生活の支援も掲げており、フードバンクとしても様々な取り組みが行われていた。

V. 考 察

食品を無駄にしてはいけない。フードバンクという存在を今後多くの人に知つてもらえるように啓発していくことが必要である。そして、必要な方に必要な分だけ届けられることが重要といえる。

VI. おわりに

一緒にフードバンクの場に立ち会うことは叶わなかった。時間が許せば、どのような人が持ち込んできてくれるのかの直に自分たちの目で確かめ実態を知ることも大切ではなかろうか。今後の課題として後輩諸氏に託したい。

なお、フードバンクに持ち込める食品を寄付することは、それを必要としている人の役に立つことは間違いない。